

だからこそ演劇なんだ。

生田 萬

●橋本匡市さんの『駱駝の骨壺』は、上方落語の古典「らくだ」に着想を得ながら、それとは異質な独特の叙情を湛えた作品だ。主な登場人物は、一組の夫婦と「らくだ」と呼ばれる彼らの子供。落語との唯一の共通点は、冒頭から「らくだ」が死者として登場するところだ。つまり、この作品では夫婦の住むマンションのテーブルの上に「らくだ」がいる。読みはじめは、虐待の末に死なせてしまった子供の処分に思い悩む夫婦の話かと思った。その点についての説明をあえて避けることで読み手をとらえたサスペンスフルかつ不条理な思ひは、やがてどんな夫婦にもあるであろうしみじみとやるせない情感に満たされることになる。このあたりの展開の見事さにぼくは魅了された。

おそらく「らくだ」とは、中絶した、あるいは死産した、いや、夫婦の果たせなかった夢、かなえられずに終わったすべての願いを象徴しているのだろうと、ぼくは思った。関西弁ではなく標準語で交わされる会話に、なぜこんなに関西がにじみでるのか。その不思議さも含めて、美しい作品だと感じた。

●山本正典さんの『あ、カッコンの竹』は、今回の候補作のなかでもっともスケール感のある作品——知的でお下劣な「おバカ」演劇の傑作だと思った。今後さらに、倫理的なタブーやネガティブ・グロテスクに踏み込んでいかれることを大いに期待しています。

●横山拓也さんの『粛々と運針』は、生か死かの選択を迫られた二組の家族の、いわば討論劇といった趣きを感じさせる作品だ。末期ガンの痛みに耐え切れず、安楽死を望む母親の訴えに動揺する息子たち。そして、予期せぬ妊娠にうろたえ、産むべきか悩む夫婦。この二つの異なる状況を「生と死をめぐる葛藤」としてひとつにくくる作者の態度に違和感を覚えた。人工妊娠中絶と尊厳死を同列に扱うのは生命倫理学の立場であり、つまり、生と死に医療はどうかかわるべきかという問題であって、人間的な立場からは決して等価に語られることではないし、演劇は人間に寄り添うべきだと感じたからだ。

●くるみざわしんさんの『同郷同年』は、原子力発電所が必然的にはらむアポリアに真正面から挑んだ作品だ。ひとたび原発を稼働させれば必ず使用済み燃料、すなわち、放射性廃棄物が出る。その処分場をどこかにつくらなければならないのだが、すすんで受け入れる自治体はいまだに現れず、その間にも原発サイト内での廃棄物の一時保管は限界に近づきつつある。——これだけ差し迫った危機が存在するにもかかわらず、そのことをぼくたちはほとんど知らされていない。オールド・メディアは言うに及ばず、ネット空間にさえ大々的に情報が飛び交うことはない。だからこそ演劇なんだと作者は考えた——かどうかは定かではないが、そうした演劇の可能性をあらためて認識させるだけのインパクトをこ

の作品はもっている。

「反原発一本でやれる時代は終わった」と劇中で登場人物のひとり語る。原発建設／再稼働に対しては、代替エネルギーへの転換という代案をたてて反対することができる。しかし、最終処分場の建設反対には代案がない。核のゴミをどうするかは処分場建設以外に解決策はないのだ。そこで彼は言う。「ここで処分場を受け入れなかったら、なんだお前の反原発は自分さえよければいいって運動だったのかっていわれちまう」重いコトバだ。しかし、作者はその主張だけに決して偏ることなく、年齢も出身も同じ「同郷同年」の三人の男たちの三者三様の立場の違いから生まれる葛藤からドラマを紡いでいる。その筆の確かさは、まさしく大賞にふさわしいものだった。

●最後に一言。20年つづけた選考委員を今回をもって辞します。この賞が単に優れた戯曲を発見、称揚するためだけでなく、関西の演劇人の創造的な交流／バトルの場として機能してきたことに心からの敬意を表しつつ、今後のさらなる展開に期待しています。長い間、ほんとうにありがとうございました。